St. Luke's International University Repository

COVID—19迫られた変革と対応，その成果と課題

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-09-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀内, 成子, Horiuchi, Shigeko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00016509

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

【特集：COVID-19と看護実践】

COVID-19迫られた変革と対応，その成果と課題

堀内　成子

Ⅰ．はじめに

2020年４月１日の学長就任宣誓式を経て，筆者は初めて学長の重責を担うこととなった．2014年度になされた大学と病院との法人一体化以降，聖路加国際病院は学校法人聖路加国際大学の付属施設に位置づけられ，大学のガバナンスは，理事長に次いで学長がその役割を負う立場にある．

F・ナイチンゲール生誕200年，聖路加国際大学の看護教育100周年にあたる記念すべき年が，COVID-19の世界的流行により世界中の人々を悩ます事態になるとは，だれも予想しなかった．人類史上まれにみる激動期に生きていることを実感しながら，11月まで無我夢中で駆け抜けてきた．その足跡を振り返り，迫られた変革と対応，得られた成果と今後の課題を記すものである．

Ⅱ．COVID-19治療拠点となった聖路加国際病院

2020年１月22日，国内２例目となる新型コロナウイルス感染症患者が聖路加国際病院に入院して以降，病院内がひとつのチームとなって対応してきた．病院長主導により毎日９時と15時にCOVID-19ミーティングを開催し，当日の受入可能患者数，受入病床の調整，最新治療や検査法の協議，法人内の感染予防策，保健所や東京都との連携調整等が行われ，管理職にはイントラネット経由で情報共有がなされた．

３月半ばにWHO（World Health Organization）が「パンデミック」を宣言，４月７日には日本政府が緊急事態宣言を発令し，世の中はStay Home一色となったが，これに反し病院では新型コロナの患者治療のため業務多忙を極めた．

４月から５月にかけての第一波の感染状況下，看護教員は学内外での支援に奔走した．聖路加国際病院への臨床支援，都内保健所への保健師派遣，全国の看護職メンタルヘルス電話相談（日本看護協会），訪問介護者向けの感染対策動画作成（厚生労働省），Web妊産婦教室（日本助産師会東京都支部），「医療的ケア児の家族の語りプロジェクト」（小児看護学共催）など，専門職者として支援に力を注いだ．

聖路加国際病院でのCOVID-19受け入れ患者数（１月22日～９月11日実績）は，600人で，陽性者206人中の死亡退院は３人にとどまった．それぞれの専門家がチームの一員として最善の治療とケアを行い，患者の回復を目標にした行動をとった結果と理解しており，個々の職員の奮闘に心から感謝したい．

10月に入り，聖路加国際病院で入院を経験した方々より，治療中の対応に触れ医師・看護師・医療連携等への好意的な新聞記事が寄せられた（日本経済新聞：黛まどか氏，朝日新聞：住吉美紀氏）．10月16日に執り行われた聖路加記念日の永年勤続表彰式典で，筆者はこの記事を取り上げ，すべての職員に感謝するとともに，１人ひとりの働きの賜物が輝く場所であることを誇らしく噛みしめた．

Ⅲ．大学（看護学部・看護学研究科・公衆衛生学研究科）学事暦・教育方法

２月末に政府によるイベント等の自粛要請を受け，３月の卒業式・修了式の中止を公表，これに代わり３密を避けた方法で学位授与のみ行った．

看護学部では，３月中旬に新年度授業が始まる学士編入４年生の授業を遠隔実施とし，４月の入学式を中止，看護学部・看護学研究科の新学期を５月の連休明けまで繰り下げ，全学的に遠隔に切り替えた．公衆衛生学研究科は，2017年の開設当初から遠隔授業が併用されていた為，大きな混乱はなく４月より授業を開始した．

遠隔授業に切り替えることに幸いしたのは，すでにクラウド型の教育支援サービス「manaba」を活用していた点であった．「manaba」は，Learning Management System（LMS）とよばれる学習管理システムで，課題管理や情報発信機能やポートフォーリオ機能を備え，学修過程の成果物を個人単位で在学期間にわたりクラウド上に格納していくことができる．これまで「manaba」を活用していなかった授業科目もフル機能を活用することとなった．看護学部・看護学研究科では，一気にオンライン授業が標準授業形態となった．新入生には，授業科目の履修登録，遠隔授業に必要な「manaba」の使用手順書

受理日：2020年11月20日
聖路加国際大学

などを郵送した.

突然の e-learning は，学生にも戸惑いをもたらした．授業を開始した５月，出席確認，自宅での Wi-Fi 環境トラブル，デバイスの使い方等，問い合わせ・支援への対応に教職員は多忙を極めた．学生の状況を把握する為の緊急アンケートの実施，電話での相談対応，図書の郵送，ノートパソコンやモバイル Wi-Fi の貸出対応も行った．キャンパスでの対面が叶わない状況下，新入生歓迎の意を伝えるべく，教職員・チャプレン・上級生が大学紹介動画を作成し，校舎案内や専門科目の特徴や校歌の意味などを“ルカ・チューブ”として配信するなど，授業以外の Web 交流の機会を設けて，新入生の不安の軽減を図った.

毎年８月に開催する夏のオープンキャンパスは，対面実施を中止し，オンライン・オープンキャンパスとして開催した．登録来場者は学部約1,000人，大学院約180人であった．2019年は，学部約2,200人，大学院約150人であり，学部プログラムでは参加人数が半減したが，一方で地方からの参加者が増えるメリットがあった．秋を迎え，新型コロナと共に歩む社会がニューノーマル（新常態）となり，一部対面授業も取り入れつつ，感染対策に配慮した授業が中心となった．病棟実習の多くは，学内演習やシミュレーション学習，Web カンファレンス等に振り替えられた．９月には大学院看護学研究科初の「秋入学」修了生の学位授与式を講堂にて対面で行なった.

11月には卒業生を参加対象としたイベント「ホームカミングデー」を Web 開催し，事前登録約400人，当日ライブ交流会の参加者は約200人，講演会視聴550人（11月13日現在）となった．2019年度の交流会参加者が51人であったことから，遠方からの参加が容易である Web 開催のメリットが生かされた結果となった．ライブ交流会では，現役学部４年生から，卒後30年以上を経た方まで参加があり，キャリアアップや育児・介護と仕事との両立，母校での思い出などを自由に語り合った.

Ⅳ．休学・退学の学籍対応（学部・大学院）・経済的問題

４月に入ってから休学の相談が相次いだ看護学研究科大学院生を対象として，学業・研究状況に関する緊急アンケートを行った．この結果を受け就学の継続が困難と考えられた学生に関しては，遡及して休学手続きを認める措置を５月の教授会で講じた．その結果，看護学研究科では，2019年度の休学者割合が10％程度であったものが，2020年度は修士課程で２倍，博士後期課程で３倍となった．休学の主な理由は，コロナの影響により業務多忙で研究や学習ができなくなったこと，医療現場でのデータ収集の受け入れ中止，海外を研究フィールドにしていた院生は渡航ができなくなった等であった.

学生への経済支援として，文部科学省学生支援緊急給付事業，学生支援機構「新型コロナウイルス感染症対策助成事業」，私学事業団補助金による家計急変を事由とした授業料減免等，学生への経済的支援を行なった.

５月18日には，看護学部生287人の署名と共に「聖路加国際大学の全学生に対する学費の返納・減額，支援金の支給」を求める嘆願書が学長宛に届いた．この嘆願書を届ける学生の自主性に頼もしさを覚えながら，まずは授業料の考え方を説明し，学費は返納しないが，経済的に困窮する学生への支援は行うことを約束した．その後７月21日に「学びの継続のための学修支援金」として一律５万円を給付することを全学生に伝えた.

学生の経済支援と，教育の質を担保するための環境整備の両面から学生を支援するため「新型コロナウイルス共存時代の学生支援募金」を立ち上げ，初めてクラウドファンディングを実施した．８月28日から９月30日までの短期間ながら，目標額500万円を超える642万円を達成した．多くの同窓生や一般市民のみなさまからの寄付と応援メッセージをいただいた.

Ⅴ．教授方法の変更を迫られた看護基礎教育（学部）

文部科学省からの事務連絡に沿う形で教育方法の変更を行った．特に，2020年２月28日の「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係者職種の各学校，養成所および養成施設等の対応について事務連絡」，および６月１日の「医療関係職種等の各学校，養成所および養成施設における，実習の弾力的な取り扱い等について事務連絡」は，教育方法変更の大きな指針となった．「新型コロナウイルス感染症の対応等による学生間の修学の差が生じることがないよう配慮する」「実習施設の変更の承認申請に係る時期の弾力的取り扱い」「年度をまたいでの実習を行って差し支えない」「実習施設等の代替が困難である場合，実習に代えて学内実習等を実施することで，差し支えない」点などを踏まえ，柔軟な対応に踏み切った.

後期の看護学部の実習について，学生実習の受け入れが許可された医療施設においては期間や人数を調整して実習を行う方針とした．しかし，聖路加国際病院での学部生の実習はおおむね中止とした．同院が COVID-19治療の拠点病院であり，長期間にわたり厳格な学生の健康管理を行いながら，体調不良時には実習に代わる学びを担保する体制の維持が必要となること，感染による学生・患者・家族・医療従事者への影響の大きさ等を熟慮したうえ，病院での病棟・外来実習を中止し，学内実習に切り替える決定がなされた．この判断は，リアルな対人関係の難しさ，臨床の緊迫状況から学生が自分の課題に気づく機会の喪失であり，苦渋の決断であった.

病棟実習の多くは，学内演習やシミュレーション学習，Web カンファレンス授業の手法で展開されている（図１，２）．学内実習では，アセスメント能力を育むために，シミュレーション患者と看護師による動画，電子

カルテと同様の情報を掲載した教材，患者の視点からみえる治療やケア環境（ICU，病室，授乳室等）を示す動画，臨床看護師や管理者の働きを示す教材，上級生ラーニングアシスタントによる看護学生１日の動き動画など，各教科とも教員が実習目標の達成への方略を再検討し，いかに臨床を伝えるか考え抜いていた．Web 環境では，患者の多様性，臨床現場の緊迫感，変化のスピード，スタッフとの一体感が乏しく，限界がある一方，落ち着いて考えることができ，病室内でみえなかった学生の言動が可視化され，学友や教員からフィードバックが得やすい等の利点もあった．

通常は医療機関で行われる実習を，学内実習として，いかに感染予防に努めながら実施しているかの取り組みについては，外部からの取材・情報提供依頼（NHK 首都圏ニュース，文部科学省高等教育局）を受け，実習に参加する学生の生の声も紹介された．実際のリアルな患者の治療や反応がわからない，臨床への恐怖感や過剰反応など，心配はつきないが「いましかできないオンライン実習」だからみえた学生のコミュニケーションの特徴や，限られた情報から想像力を働かせてアセスメントする力など，学生の可能性もみえた．

Ⅵ．教職員への支援

この突然迫られた教育方法の変更や新たな Web スキル（Data Diet 等）を学ぶために，FDSD（faculty development/staff development）委員会が「教えるを支えるシリーズ」を開催して，遠隔授業や学内実習の教授法や教材や学生負担の少ない教示方法，動画作成の工夫点を学内の教員に紹介し，互いによりよいものを学び合った．外部企業等からの遠隔授業セミナー等の情報提供も積極的に行った．

また，精神看護学教員を中心とした有志により，コロナ禍での教職員のストレスをシェアする時間，教職員のメンタルヘルス向上を目的とした，支え合いの Web ミーティングが提案された．「コロナ時代―看護教員が語る会」と称して不定期に２か月に１度程度開催して，自由につぶやき助け合う時間をもつことができた．この会は，聖路加国際大学がこれまでに育んできた，支え合う文化や精神の表れと感服している．

Ⅶ．研究活動への対応（大学院生・教員・倫理審査体制）

対面でのデータ収集を Web 方式に変更することや，期間の延長，その他研究手方法の変更が相次ぐなか，これら変更申請に対して，倫理審査委員会が迅速に対応を行った．大学院においては，計画の変更審査や，学位論文の評価について，従来よりも弾力的な対応が行われた．

図１　糖尿病の模擬患者演習と Web カンファレンス

図２　密を回避したシミュレーション（別室に生中継）

Ⅷ．学生支援：就職試験・国家試験・健康管理（メンタルヘルス）

就職活動においては，インターンシップの相次ぐ中止や，Web での面接実施等，さまざまな環境変化があり，とまどう学生への対応として，学生部・アドバイザー教員が細やかに面談の場を設定した．継続的なフォローを行っているが，11月現在での進路未決定者の割合は10％弱に上っている．看護師国家試験に関しては，前年度に不合格者が多くみられたことから特別ワーキングを立ち上げ，模試結果をいかに読み解き，適切な学習につなげていくかの対策を講じている．

図３　看護実習服の変遷を記したクリアファイル

Ⅸ．看護教育100周年記念事業企画

感染予防の観点と，新型コロナウイルス対応による病院の減収状況から，記念事業の簡素化を決めた．当初，記念式典と祝賀会を予定していた10月24日に記念礼拝のみ執り行い，式中で本学創設者トイスラー博士の孫であるリングウォルト博士から届いたビデオレターを紹介した．この記念礼拝の様子や学生制作の動画については，看護教育100周年記念サイト（http://www.luke.ac.jp/kango100/index.html）で配信した．当初，記念式典の教育講演として国際ヘルスヒューマニティーズ学会の中心的存在，ノッティンガム大学ポール・クロフォード博士をイギリスより招聘する予定としていた．来日は叶わなかったが，講演の動画を，前述の記念サイトで，同氏のレクチャー“Florence Nightingale at Home”として公開している．

記念事業の一環として，小冊子「聖路加の看護100のエピソード」を刊行するため，同窓生，聖路加国際病院で勤務経験のあった方々からの寄稿を募った．また，本学卒業生が手がけた，看護実習服の変遷のイラストを用いて，記念広告の掲出（日比谷線築地駅内）およびクリアファイルを作成した（図３）．

戦中・戦後の看護学校，看護大学時代から今日まで残したい記録，伝統として受け継がれたものはなにか．本学が先見性，進取の気質をもつ学校として，挑戦し続ける人材を育成してきたことを実感した．

Ⅹ．おわりに

COVID-19パンデミックにより迫られた教育・研究活動を記した．本稿においては，治療の拠点病院を隣接敷地内に擁する聖路加国際大学の奮闘の日々を記した．2020年春，看護学部461人，大学院生213人，合計741人の在籍者を有する高等教育機関は看護教育100周年を祝う年であり，だれもが忘れられない年度となった．

困難に直面したときの教職員の柔軟な対応力，協力を惜しまない精神に支えられた日々であった．聖路加国際病院との協働体制の強さを再体験しながら，みえてきた課題はWithコロナ時代の教育設備の弱点やICT（information and communication technology）システムの脆弱さであり，それらは次の中長期ビジョンの策定に盛り込むべき事柄であると認識した．

100年後の未来はどうなっているのであろうか？世界中の人々を巻き込む疫病災害が再び起こるのであろうか．AI（artificial intelligence）と共に生きていく時代であっても，人間同士が協力し，それぞれの賜物を生かして，人々の幸福に奉仕する精神は継承したいと願う．